様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４４５

研究課題名（和文）ヒューマニズムと宗教改革が近代初期イングランドの演劇に与えた相乗的影響

研究課題名（英文）Synergistic Effects of Humanism and Reformation on Early Modern English Drama

研究代表者
高田　茂樹（TAKADA, Shigeki）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：４０１３５９６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：　俗世における個人の努力を強調するヒューマニズムの文化と、神への絶対的な帰依と魂の救済の確信を得るための不断の努力を旨とするプロテスタンティズムの心性とは、しばしば相乗的に作用して強固で継続的な行動の動機を形成する反面で、現世における成功を優先しがちな前者の発想と来世における魂のあり方こそを最も重視する後者の倫理は激しい葛藤を引き起こすこともあり得た。こういった矛盾をはらんだありようを劇作家は自分の創作を通してどのように分節化し対処していったのかという観点から、シェイクスピアの初期の『ヘンリー六世』三部作、『リチャード二世』と、晩年の『冬物語』を分析・解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　シェイクスピアのキャリア全体に亘って、彼の関心の中心にあった、個を超えた秩序への信奉とそれを破って自らの力を発揮しようとする意志という、相反するありようの起源の一つを、ヒューマニズムの文化と先鋭化した宗教倫理という、協同しつつ対立もする時代の思潮に求めて、初期の歴史劇と晩年のロマンス劇とで、それぞれがどう発現しているか解明して、シェイクスピアの中に流れる世俗的な関心と超越的なヴィジョンとがどのように影響し合い変容していったかを統一的に理解する視座の基礎が得られた。こういった視座は、シェイクスピアのみならず、他の劇作家や詩人たちの作品を理解する上でも、きわめて有効な手立てになると考えられる。

研究成果の概要（英文）：The humanist culture, which emphasizes an individual’s efforts in the mundane world, and protestant ethics, that demands the absolute submission to the God and constant endeavor to get assured of the salvation of one’s soul in the next world, sometimes work together to motivate incessant active exertions, but often causes intolerable inner conflict in one’s mind. From the viewpoint of how dramatists articulate and deal with this contradictory mode of being through their creations, I analyzed “Henry the Sixth” and “Richard the Second, the plays written by Shakespeare in his early years, and “The Winter’s Tale” from the last years of his career.

研究分野：イギリス文学

キーワード：エリザベス朝演劇　シェイクスピア　ヒューマニズム　宗教改革

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）近年、エリザベス朝演劇の研究において、劇作家とその歴史的状況、特に宗教上の思潮や宗教界の動向との関わりに新たに強い関心が向けられている。

（２）イングランドでは、君主の交代の度に教会の宗派・体制が変わり、多くの弾圧や迫害、亡命や謀反を招いた。そういった中で、メアリーによる過激なカトリック回帰策に続いて登場したエリザベスの政権にとって、温和なプロテスタントの教義に依拠しつつ、現行の政治体制と君主への忠誠心を涵養することは必須の課題であり、そういう施策は人々の意識形成に大きな影響を及ぼした。

（３）この間の宗教意識の高まりは、神と人との関係の深化に直接繋がる一方で、多くの迫害の犠牲者や殉教者を出したことが、逆に人々の信仰を堅めることを促し、宗教的に戦闘的でありながら、同時に深く内省しようとする主体が構成されていった。

（４）また、こういう宗教意識と並んで、ヒューマニスト的な教育によって培われた強烈な現世中心の自我の感覚も、当時の主体の構築に大きな力を発揮した。現世での自己実現こそが生の意義であると見なすヒューマニスト的な発想は、神への全面的な隷従を唱えるキリスト教の考え方と、潜在的に真っ向から対立するものだった。

（５）このように、対立し合う規範や発想に晒されることで、人々は、うちに大きな葛藤や矛盾を抱えた精神を育んでいったと考えられる。本研究では、こういうエリザベス朝の心性を、宗教改革とその社会史的意義に関する最近の研究を踏まえて、イギリス政治史研究の成果も併せて検証して、そういった主体のあり方や社会状況が、当時の演劇とりわけ英国史劇や悲劇の創作にどう作用し、また、そういった芸術表象が人々の現実感覚やありようにどう影響したかを多角的に探っていこうとするものである。

２．研究の目的

本研究では、近代初期イングランドの演劇、とりわけ英国史劇を初めとするシェイクスピアの演劇の創作に対して、ヒューマニズムと宗教改革、及び近代国家の政治体制の確立と 1580 年代以降におけるその危機とが、相乗的にどう影響しているのかを解明することを目指した。そうするために、

（１）新旧両派の聖職者の著作や、迫害や殉教についての記録、あるいは、祈祷書やその周辺のテクスト、それらに関する研究書などの精読を通して、16 世紀後半期のイングランドの人々の宗教意識や、それと国や君主への政治的な忠誠心との関係を詳らかにしようとした。

（２）同時に、当時広く読まれたヒューマニストのテクストやその研究書などを詳しく検討することによって、そういったヒューマニスト教育によって培われた精神のありようを探って、上記の信仰形態や政治意識に関して得られる知見と重ね合わせて、イギリス・ルネサンス期の主体の全体構造の多角的な解明に努めた。

（３）その上で、シェイクスピアを初めとする劇作家たちの作品とその研究書の精読を通して、彼らが、それぞれの戯曲の執筆と上演をとおして、そういった精神的状況をどう表象し、イギリス・ルネサンス演劇に固有な世界を作り出していったのか、探ろうとした。

一方で、そういった際に、単に同時代的な資料と照合して、作家の主体のありようを位置づけたり作品の中に描かれる人物の言動を意味づけたりするのではなく、現代の精神病理学や物語行為論の知見にも照らし合わせて、そういった主体や人物の言動の意味を探り、それが現代の私たちに持つ動的な意義を解明しようとした。

３．研究の方法

（１）まず、新旧それぞれの派の教義やその周辺の迫害や殉教にまつわる文献や言説、ヒューマニスト的な視点からの教会批判や教育論、教義に基づく政体論など、当時の第一次資料とそれらについての研究書、さらには作家の生涯についての研究や伝記など多様な資料に広く当たることによって、近代初期の主体が時に矛盾する様々な規範に晒されて築かれる過程を、分析・解明することに努めた。

（２）その上で、シェイクスピアを初めとする劇作家が、そういった主体構成を経ることによって、どういった自己観を持つようになり、そういった自己や世界についての感覚を、自らの創作行為を通して、どのように表象し構築し直していったのかを、多角的に考察した。

（３）その際、これらの作品には、しばしば、権謀術数を駆使し宗教を虚構として操作しようとするマキャヴェリ的人物が登場するが、その描写の仕方や人物が辿る運命というのはけっして一様ではなく、作家ごと、作品ごとに異なり、時代とともに変化してもゆくことに着目して、共通性を持った登場人物の多様な描写・表象を作品ごとに分析することで、劇作家が時代の精神とどう対峙して自らの主体性を構築していったのか探る手立てとした。

（４）その一方で、「目的」の項で触れたように、現代の精神病理学や物語行為論の知見を積極的に取り入れて、創作者である作家主体が構成されてゆく過程やその主体が抱える葛藤の現代的な意義を問い、そういった作家に作られた人物が歴史的な状況をどう映し出し、それがどういう問題性を浮かび上がらせ、そのことで現代の私たちに何を訴えることになるのかも、同時に探ろうとした。

４．研究成果

研究の第１年目（平成２８年度）には、このプロジェクトに関して、二つの論文を発表した。
（１）一つは、「人生夢芝居―転換期を生きる人々」で、これは、ルネサンス期のように社会状況が大きく変化してゆく中にあって、ヒューマニスト的な修辞教育を受けた人物が、世界や自身を虚構と捉えようとする傾向があることに着目して、それがシェイクスピアの演劇や当時の文人や政治家の行動や著述にどう表されているか考察して、その一方で、そういった認識が、自らの存在に根拠がないという感覚に繋がっていることを論じて、こういう感覚が以降の悲劇の重要な基点となっていることを説いたものである。（なお、この論文は、後に一部加筆・修正して、単著『奈落の上の夢舞台―後期シェイクスピア演劇の展開』の序章に充てた。）
（２）もう一つは、『リチャード二世』―神と人、王と臣下のあり方と関係を巡る一考察」で、こちらは、内乱で社会の階層制度が崩壊し、それを拠り所としていた人々が精神的に荒廃していく過程をたどった「英国史劇前期四部作」に続いて、シェイクスピアが秩序の喪失が前提とされた世界で、人が自身と世界とのあいだにあるべき関係をさまざまに模索したものとして、『リチャード二世』を論じたものである。リチャードとボリンブルックという二人の主要人物は、それぞれ宗教的な言葉をしきりに用いる。前者は、王位・王権の神聖さといった言葉を弄びながら、自らの行動によってそれを実質化するという努力を欠いており、後者は敬虔に振る舞いはするが、それは心の底からの信念によるものではなく、マキャヴェリ的な意図を裡に秘めた演技として行われていることを感じさせる。政治的には、後者が勝利し前者はほとんど自滅してゆくのだが、双方とも、自己と世界との関わり方という点で十分に納得のいくものではなく、より十全な関わり方を求める模索がこれに続く『ヘンリー四世』二部作や『ヘンリ−五世』の基本をなしており、さらにそれ以降の主要な悲劇のテーマに繋がっていくということを論じている。
（３）２９年度から 30 年度にかけては、論文「崩れゆく世界の中で―シェイクスピア『ヘンリー六世』三部作―」（上）ならびに（下）の二論文の中で、この最初期の三部作について、背景に考えられる、当時の教育や説教を通して培われたあるべき信仰や社会についての理想と、それが現実に破綻しつつあるという認識との乖離を前にして、劇作家が、自らの創作を通して、どう対処したのか考察した。そのうち、（上）の前半では、このような理念が、エリザベスが君主の座に就いて以来、その統治の安定のために、とりわけ重視され積極的な浸透が図られた経緯を辿るとともに、1580 年代後半以降、国内外の宗教的対立の激化や大国スペインとの慢性的な戦争状態と国庫の逼迫、女王の老いなど、政治的、経済的な行き詰まりとともに、それがしだいに破綻していく歴史的な過程を追った。そして、後半で、そういった社会状況をシェイクスピアが、『ヘンリー六世・第一部』の中で、いかに映し出し、そういう問題が人の内面にどのような影響を及ぼすのかさまざまな社会関係を体現した人物たちの行動を通して描写している様子を解明した。とりわけ、そういった理念を体現した存在として、武将トールボットを捉え、その活躍を通して、そういった理念の意義を再確認するとともに、そのトールボットが国内に残る貴族の対立や怠慢によって孤立し命を落とす経緯の中に、この時代の主体のありようの困難さが表象されていることを論じた。
（４）30 年度に執筆した論文「崩れゆく世界の中で―シェイクスピア『ヘンリー六世』三部作―」（下）では、『ヘンリー六世・第二部』・『第三部』を通して、そういう関係や意識がさらに崩壊していって、人々が完全な精神的荒廃に陥っていくさまが描かれているのを追う一方で、その中で、新しい人間像や宗教意識の萌芽が示唆されていることを論じて、それが、後に続く『リチャード三世』や、その先の英国史劇後期四部作へと主題的に繋がっていくことを示した。このうち、『第二部』については、敬虔で国を憂う護国卿グロスターを権力欲に取り憑かれた貴族たちが破滅へと追いやるところに、伝統的な道徳観念の危機や破綻が暗示されながら、その首謀者だったサフォークの追放と殺害と枢機卿の狂死を通して表される因果応報というかたちで、伝統的な理念の意義が再確認される一方で、それを否定するように次々と謀反や蜂起が続いて、理念がさらに有名無実化していくということを見た。そして、『第三部』については、貴族たちの反目がさらに激化して、ヨーク家とランカスター家の王位継承権を巡る対立として、国全体を巻き込んだ内乱へと発展してゆく中で、人心は荒廃を極め、いかなる理念も通用しない状態へ陥ってゆく経緯を論じた。その上で、そういった状況を体現して、あらゆる価値を虚構としてマキャヴェリ的に操作しようとするグロスター（後のリチャード三世）と、無残なまでの否定に晒されながら政治と道徳に関する自らの理想を信じて安らかな心のまま死んでゆくヘンリー六世とを対比させ、この対照的な人物像を通して、君主とさらには人間一般がどうあるべきなのかを問うたものとして作品を捉え、以降の歴史劇と悲劇に繋がっていくものであることを示した。
（５）また、平成 29 年度に口頭発表した「〈成り上がりのカラス〉は懐古する―『冬物語』のだまし絵」を加筆・修正して、単著の論集『奈落の上の夢舞台―後期シェイクスピア演劇の展開』の第 6 章として、これを刊行した。この論文の中で、シェイクスピアの最晩年の作品の一つである『冬物語』について、これを、作家が自らの芸術を完全に独立したものとしてではなく、文芸の長い伝統や多くの常套に依拠し、インターテクスチュアリティの多元的な広がりの中で生起するものと捉えるようになっているということをさまざまな例を挙げて論じた。そういったことはまた、文芸のレヴェルについて言えるだけでなく、実人生との関わりについても成り立っていると考えられ、この作品は、その内部で完結しているのではなく、シェイクスピアのそれまでのキャリアの中で直面しその節目となった出来事や挿話が随所にちりばめられて

おり、彼が自らの経歴を振り返って、その間に自分が周囲の人々や劇壇とどのように関わり合い、どのような課題に取り組み、自身の演劇世界を築いてきたのかを総決算するような具合になっているということにも光を当てた。こういった認識はまた、単に芸術上の感覚というにとどまらず、人間のありようとしても自らを周囲から完全に自律した存在と見なすのではなく、間主観的な広がりの中に深く根ざした存在と捉えていることに呼応していると考えられる。そして、そのことは、また、内面においても、一人で神と向かい合うものとしてよりも、むしろ、周囲の人々と共に体験される共生としての信仰へという宗教観の展開とも呼応しているとも考えられ、そういった意味においても、シェイクスピアの思想の深まりとして評価できるものと言えよう。彼は、この作品の中で、そういった自分の意識的な制御を超えて作用していると感じられる伝統や常套の作用を超越的な力の顕現として表象しているが、そのことも含めて、そういった時空を超えた共生の感覚の中に、シェイクスピアの晩年の芸術的な境地が感じ取れるのではないかということを論じた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計４件）

① 高田茂樹「崩れゆく世界の中で--シェイクスピア『ヘンリー六世』三部作--」（下）（『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学編』１１号，２０１９）1-３１頁　査読なし

② 高田茂樹「崩れゆく世界の中で--シェイクスピア『ヘンリー六世』三部作--」（上）（『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学編』１０号，２０１８）１７-４２頁　査読なし

③ 高田茂樹「『リチャード二世』--神と人、王と臣下のあり方と関係を巡る一考察」（『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学編』9 号，２０１７）１７-４１頁　査読なし

④ 高田茂樹「人生夢芝居--転換期を生きる人々」（『言語文化の越境、接触による変容と普遍性に関する比較研究』〔金沢大学人間社会学域人文学類、２０１７〕８９-１０８頁）査読なし

〔学会発表〕（計１件）

高田茂樹「〈成り上がりのカラス〉は懐古する--『冬物語』のだまし絵」第 56 回シェイクスピア学会（近畿大学東大阪キャンパス〔大阪府東大阪市〕、2017 年 10 月 7 日〔土〕、8 日〔日〕）査読あり

〔図書〕（計 1 件）

① 高田茂樹『奈落の上の夢舞台―後期シェイクスピア演劇の展開』（単著、水声社、305 頁、2019）（書き下ろしの論文「〈成り上がりのカラス〉は懐古する―『冬物語』のだまし絵」〔第六章 213-244 頁〕を含む。）

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。